



つがるの昔っこ (昔話) 16

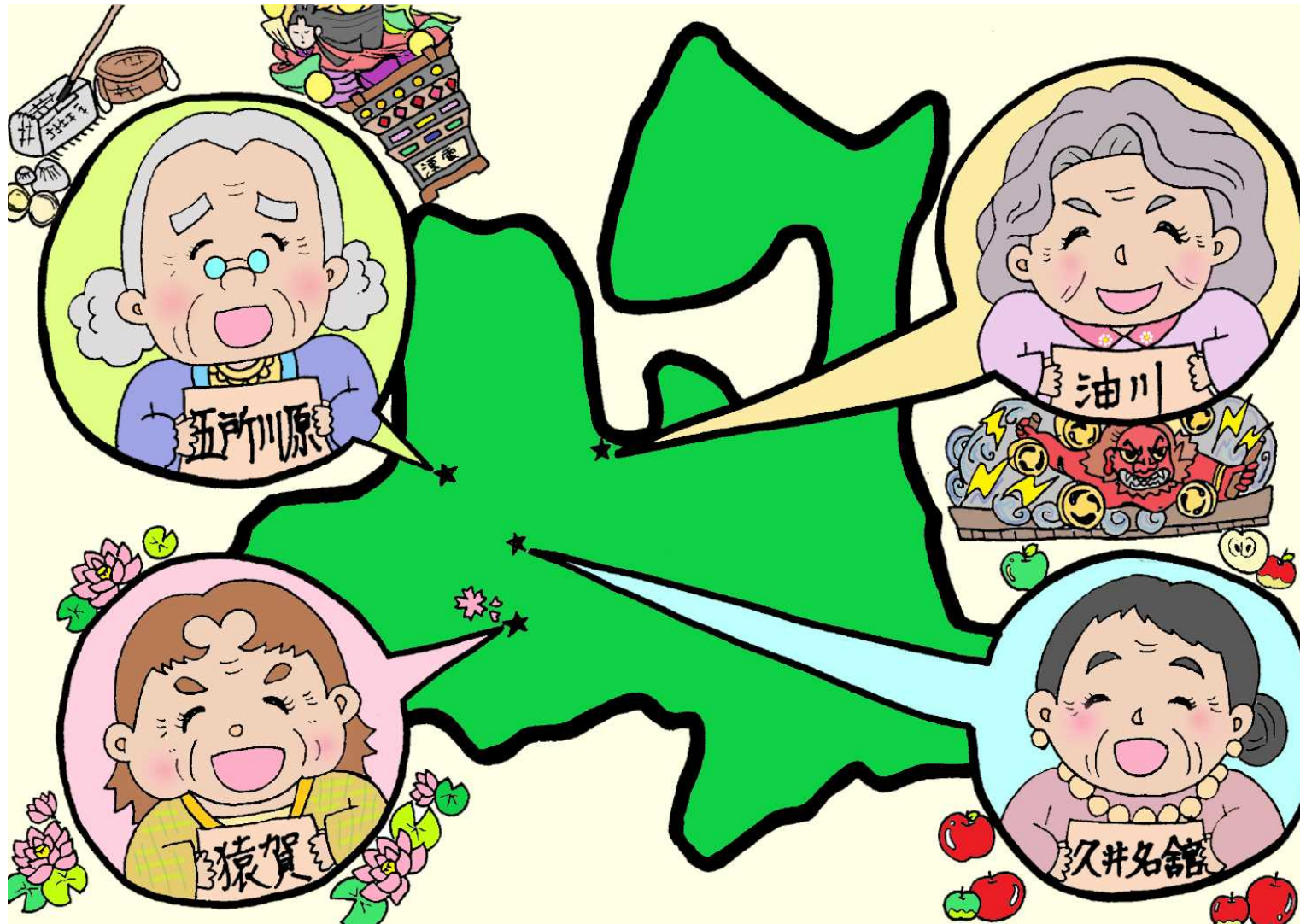
地名の話コ (律軽弁)

国土交通省 東北地方整備局
岩木川ダム統合管理事務所
イラスト、カラーリング
:やざわ ゆな

ある年、弘前の観桜会（かんごうかい）に来た、四人のバサマ（婆様）居だど。四人のバサマ共（ど）、昔（むかし）、同じ村さ住んでいだ幼なじみで、仲良（ながい）くてあったんだど。

娘（めらし）になった頃、四人ア、それぞれ、嫁コになって行ったずおん。
一人は猿賀（さるが）さ、一人は久井名館（くいなだて）さ、一人は五所川原（ごしょがわら）さ、一人は油川（あぶらかわ）さ行ったんだど。

久しぶりに、観桜会で再会したバサマ共ア（ど）懐かしい昔話コさ花コ咲がへで、夫（おやじ）の話だの、子供（わらし）、孫の話だのして、飽きる事無（ね）がったど。



猿賀(さるが)のバサマの話コ

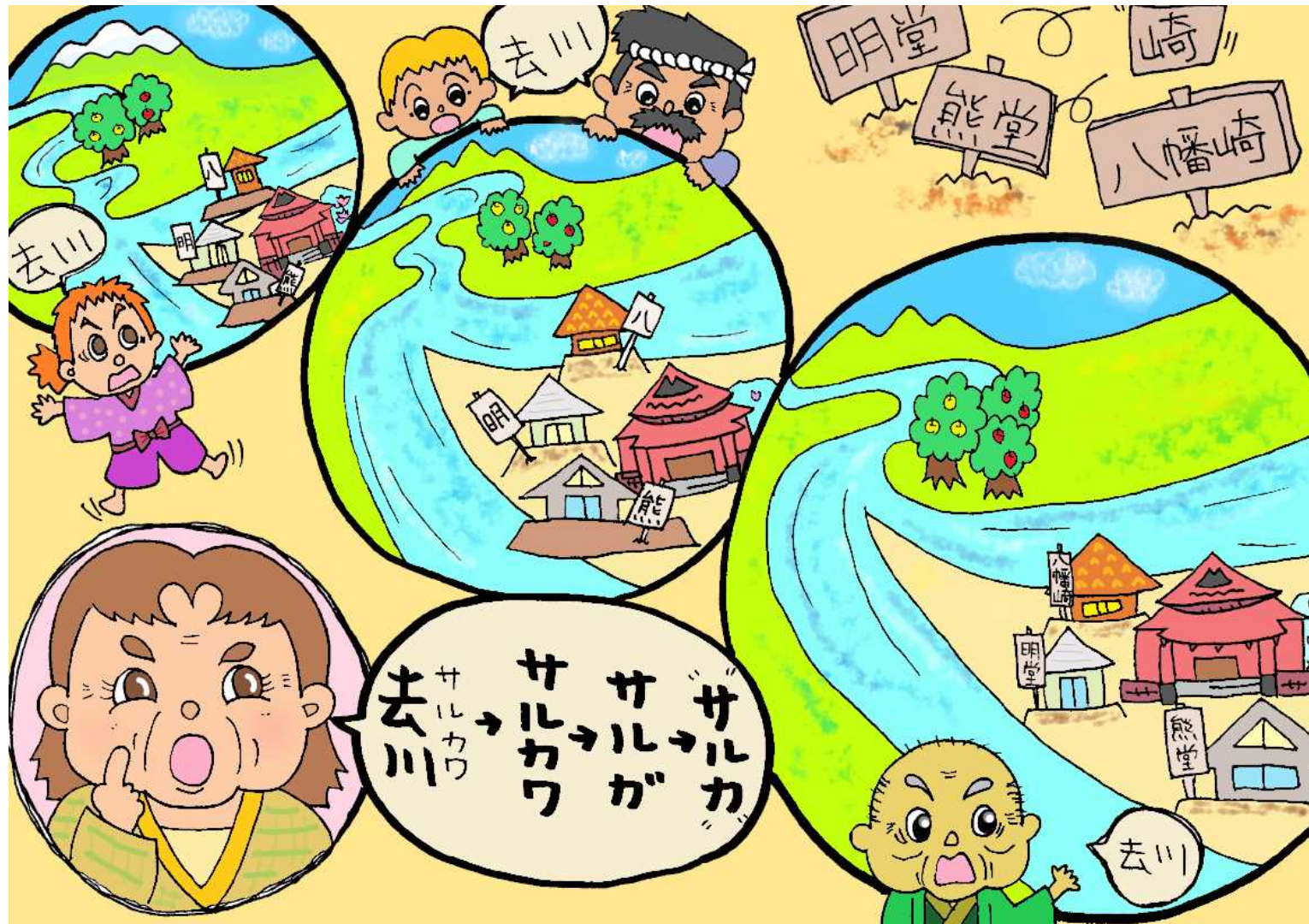
昔々、浅瀬石川と平川は、丁度(ちよんど)、今の猿賀さまのあたりで合流してあたづんだ。

その川さ、なんぼも突き出た陸(おが)コあってせ、それは、明堂崎(みょうどうざぎ)、熊堂崎(くまどうざぎ)、八幡崎(やわたざぎ)と呼ばてあたど。



何十年も、何百年も経って、この二つの川の出会う所ア(どご)少(すこー)しずつ動いていって、今だば、この二つの川コ、尾上バ挟んで、北の浅瀬石川ど、南の平川、猿賀からずーっと離えだ藤崎あたりで合流して、今度(こんだ)、岩木川ど一緒になってるべ。

川のそばで暮らして居だ人達ア(ふとだじ)、川、離れて行ったどごで、そごとは、『去川(さるかかわ)、去川(さるかかわ)』って言(し)たど。そして、サルカワって言(す)音コア、いつの間(め)にが訛って、サルガになって、三つの崎(ざぎ)も八幡崎の他は崎取れて、明堂、熊堂ズ地名になって、今でも残(のご)ってるんだど。これ、私(わ)今住んでる猿賀の話コセエ。



久井名館(くいなだて)のバサマの話コ

昔せ、津軽のたんげだ所(どご)、南部の領地であったずおん。このあたりア、南部の家来の、名久井京極て言(す)侍が支配してあったんだど。

この侍の名前ばとって、その屋敷ば名久井館て言(し)て、その村の名前ば、名久井館村て言(し)てらずおんな。。



天正年間、大浦が為信様が攻めてきて、ここは奪ったと。それから、この名久井館村は津軽の領地になったと。

名久井京極ず人せ、勇敢な人でせ、わんつかばりの家来ど勇敢に戦って、為信様とば苦しめだど。そごで、為信様、戦(いくさ)終わってからも、敵ながら天晴れ(あっぱれ)て言(し)て、名久井京極、居ねぐなっても、この村の名前コはそのまま残すことにしたと。したばって、『上の字二つ入れ替えろ』て言(し)て、それがら、ここは久井名館て言(し)たんだと。



五所川原(ごしょがわら)のバサマの話

昔、ある年、岩木川の大水の時、今の五所川原の元町あたりさ、小(ち)ペーただお堂コ流れて来て止まったど。中見だきゃ、ご神体おさまってあた。

したどごで、探してみだきゃ、岩木川の上流の、相馬の五所ものであったずおん。そごで、そのお堂コとは返したど。

したきゃ、その年の秋の大水の時、同じお堂コア、又(まだ)同じ所(どご)さ流れできたど。返したきゃ、次の年もまだ、同じ事が繰り替えされた。



相馬の五所の人達ア、『神様、おすこさ行きたくて行くんだべね』て言(し)て、元町さ置くごこにしたど。五所の神様が流れてきて止まった川原だず所(どご)で、それから、そごば、五所川原て言(す)ようになったど。

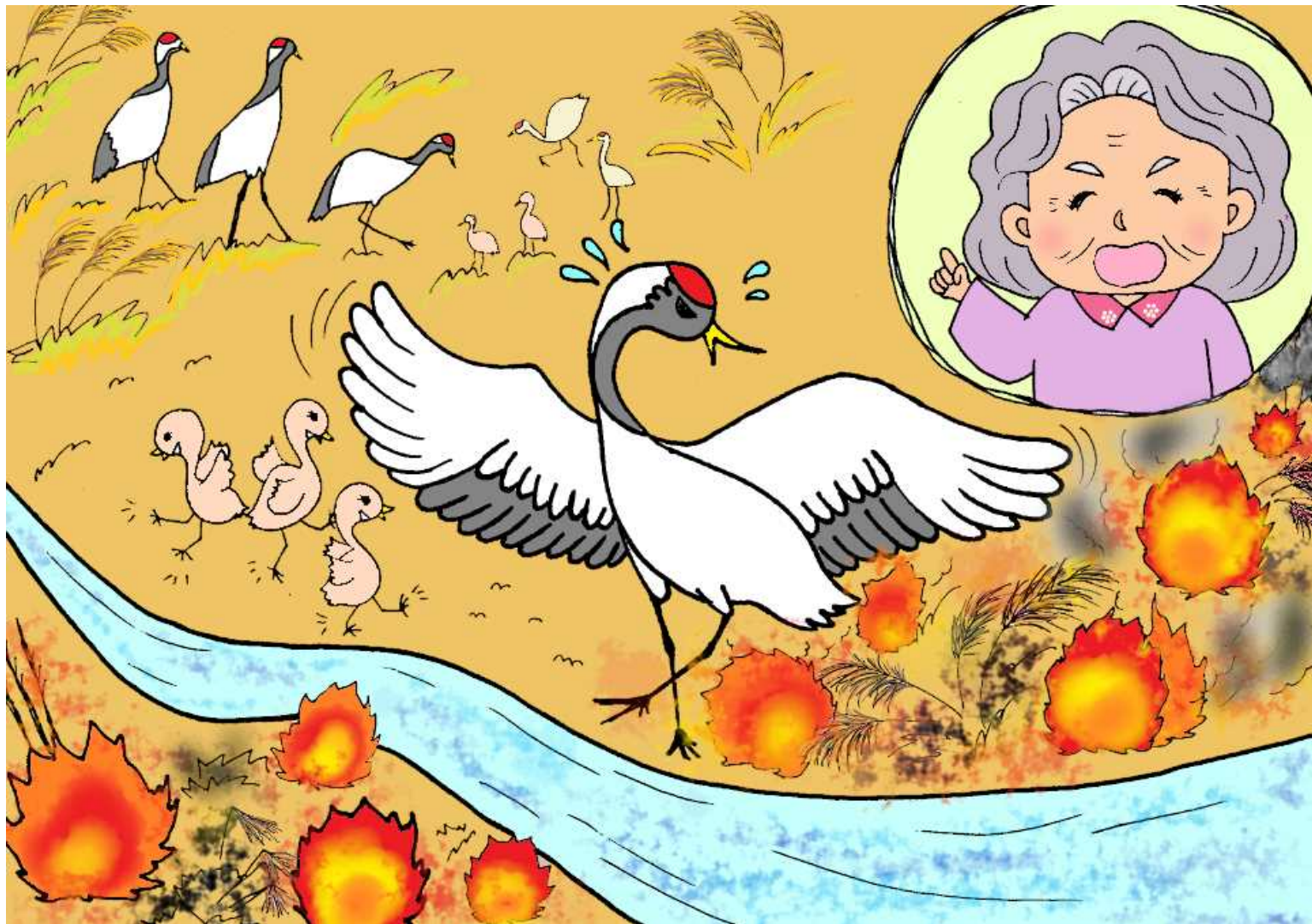
元町の八幡様さ、そのときのご神体、今でも祭(ます)らえでるとど。



油川(あぶらかわ)のバサマの話コ

昔々、今の青森の油川のあたりよ、広ーい広い野原で、そごさ、鶴の親子、住んであたんたど。ある日、野火ア起(おご)って、火めらめらど燃えて、野原一面さ広がって行ったんだど。

さ、鶴の巣さも迫ってきた。母親の鶴ア、子鶴ば庇(かば)って羽ば広げてだばて、とうとう火かぶって、死んでまたど。



火、行ってまったきゃ、母鶴、焼けただれて、体がら油をにじませて倒れてあったんだど。
その油、タララ、タララて流れ出で行って、すぐそばの川さ入って、川の色、七色に光ってらんだど。
我が身を捨てて、子鶴ば守った母鶴の姿を見た町の人達は、こことは、
『母鶴の油が流れていた川』ズ事で、『油川』て呼ぶようになったんだど。



四人の婆様達、朝間から夕方まで喋って喋って喋って、飲んで飲んで、食(く)て食(く)て、
笑って笑って、来年、元気で又会うべして言(し)て、それぞれの家コさ戻っていったどなあ。

とっちばれ。

